

令和4年4月1日

敬愛短大附属幼稚園だより 4月号

元気いっぱいの年長さんが巣立ち、幼稚園は聞きなれたいつもの声が聞こえず寂しさも感じている4月です。それでも、未就園児クラスと満3歳児クラスからの進級の他、初めての幼稚園入園のお友だちでいつもの活気を取り戻しつつあります。

外国では9月が新学期というところが多いですが、桜の花に見守られながらの新しい環境への第一歩も日本ならではの新たな始まりです。

卒園した子どもたちはそれぞれの小学校でどのような気持ちで入学して行くのだろうか。不安とワクワクの重なり合った気持ちは親子ともに同じことを感じていることと思います。それでもしっかりと自分の歩む道に第一歩を力強く踏み出し、前を見て様々な困難にも負けずに歩み続けてくれると信じています。若者は未来を語る人が多いですが、年長者は過去を語りがちです。今という時はあつという間に過去となり、過去の栄光や成功体験はいくら語っても過去のことで、自身の満足感にはなっても未来の満足感につながるかと言えば必ずしもそうでないことが多くあります。

現代社会はそのくらのスピード感で変化していますので、過去のことが当てはまらないことが多くなり、いつまでも過去の成功体験にしがみついていると未来社会では先に進むことができなくなってしまいます。価値観でさえ変化しています。見えない変化を見ることができる人がこれからの社会を支えて行くものと思われまます。思い出は大切に心にしまい。新しいこれからの自分の姿を心の中にしっかり描きながら進んで行ってほしいと思っています。

【意志あるところに風は吹く】

なにげない普段の生活が幸せであるのに、なかなかそれには気がつかないものです。そのことはあたりまえと思っていた普段の生活ができなくなったときにはじめて普段の生活ができることがどれほど幸せであったことかと自覚するようになります。私もそうなのですが、健康は、なんでもできていたときはそれほど感ずることはないのですが、事故などで一瞬のうちに失われてしまうと「どうして、なぜ」と問いかけたくなります。パラリンピックに出場した選手の多くはこうした一瞬を経験しています。

私の従兄で競技用車いすの製造を手掛け、パラリンピックの多くの競技で使われている車いすを開発し、世界的なメーカーに育て上げた者がいます。彼も普通の健常者でした。大手メーカーのバイクで新車開発をしていたのですが、疲れていた中でCM用の撮影をしているときにその一瞬がやってきました。それは本当に一瞬の出来事でした。

脊髄を損傷し、二度と歩くことができなくなってしまったのです。しかし、それからが普通の人ではなかなかできないことを彼はするようになるのです。自身の不幸を恨んでマイナス思考になっても不思議ではないのですが、彼は一般の人が不幸と考えることを新たな探究の世界に向けてエネルギーを燃焼させ、カッコいい車いすを開発することにしたのです。彼の持つエネルギーでそれまでの車いすは「機能的であればよい」という世の中の考えを変えて、人々がカッコいい車いすでどこにでも自信をもって出かけられるような物にしたいと考えたのです。

この世の中のないものをつくりだす喜びが彼のエネルギーです。どこまで行っても終わりのない戦いの始まりです。満足したらそこで終わりです。自分と戦い続けることこそ彼の生きる力だったのでした。

4月の初めに書くような内容ではなかったかもしれませんが、強い意志をもった人間の姿というものにはどんな困難にも負けない力強さがあります。これからの未来を支えるであろう園児たちが強い意志を内に秘めて巣立っていけるようまた新しい敬愛幼稚園の職員の挑戦が始まります。そのために保護者の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

(園長 杉山清志)